

手話サークル論

手話サークルの役員を2年つとめて、今年の春に役員をおりました。役員をやりながら感じたことを文にしておきたいという思いと、そして役員をおりて、手話サークルのことをちょっと突き放して考えられるようになり、文を書いています。

手話サークルで問題になるのは、手話サークルがどう位置付けられるのか、ということです。勿論、手話サークルに来る人は色々です。手話通訳活動を単なる労働と考え、その技術を身につけるためにくる人もいますし、手話通訳が制度化の中で、労働条件がよくなれば、ますますそういう人が増えて来る可能性も増して来ます。さらに、福祉のボランティアにありがちな「助けてあげる」という、精神的優位性を求めて来る人、福祉活動をしているということで回りの評価を得られるというようなところでかかわって来る人もいます。更に、どう考えても手話通訳活動の範疇を越えているとしてしか考えられない、NHKの手話ニュースのキャスターの、キャリアーをもつ「かつこよさ」ということなどに刺激されて手話を学び始めるひ人もでてくるのではと思います。

一方で、最近手話通訳＝労働論などが出て来ています。

手話通訳の制度化の中で、通訳活動が労働という側面ももってきているということがあります。その制度化の不備の中で頸肩腕の問題などが出て来て、労働条件の改善ということの問題にしなければならないという背景や主旨は理解できるのですが、通訳活動を単に労働としてとらえるのはおかしいと思います。勿論教育労働者や看護労働者で出されていた聖職論をもちだしているわけではありません。

手話通訳活動や手話サークルの活動には障害者運動にアンガージュ（参入）していくという意味があります。労働者として労働条件の改善や、労働として福祉活動の中心的担い手が主婦であるという位置付けから、その労働を価値の低いものとして低賃金で、ボランティア精神に支えられた荷重労働にしている側面ははっきり押さえ、改善要求→制度化を進めなければならないと思いますが、その活動が障害者運動にアンガージュするという意味があるところで、そこでそもそも成立している活動ということで（勿論そういう位置付けのない人にはそのような話は通じないのですが）、労働運動で障害者運動に敵対させるような方針をだしてはならないということではないかと思います。

手話サークルでもう一つ問題になるのは、手話の技術の優劣で、上下関係的なことが生じてしまうということ、そして、権威主義というようなことが生まれてしまうということです。このことは現在社会が競争原理で成立していて、そのことにとらわれていく傾向に常につきまといわれます。しかし、障害者運動はその健常者世界の論理と真っ向から対峙します。そのような権威主義や技術を巡る競争関係が共同性を破壊していきますし、ギルド的關係さえも生み出してしまうおそれがあります。手話サークルはこの社会の競い合う關係にひきづられつつも、自らの運動が障害者運動にアンガージュするという目標において、そのことをはっきりさせることでこのことを越え得る、技術と言う面では言わば「競い合う關係性」ではない「磨き合う關係性」を生みだせるのではと思います。

私が手話を学び始めた時、「ここ」には「あたたかさ」があると感じました。そして、役員を降りるとき、その思いは幻想だったとさえ感じたのですが、その「あたたかさ」は単に幻想だったのではなく、その「あたたかさ」は存在していた、けれどもそれを競争関係や権威主義が壊していたのではないかと考えたりしています。

役員を離れた身でこのようなことを書いていると叱られそうなのですが、手話サークルは手話を学ぶという技術の向上ということが求められるし、そこで「競い合う」関係が生じてしまう恐れが常にあるのですが、手話を学ぶ目的、手話通訳活動の目的を常に問うていく中で、「磨き合う」関係として新たな共同性をうみだせるのではと願っています。その同じことを私は自らの障害者運動の中で追及していきたいと思っています。